

# ウクライナ人道危機 難民・国内避難民支援の現場



認定NPO法人「難民を助ける会」

中坪 央暁

難民を助ける会(AAR Japan)の中坪と申します。本日は限られた時間でございますが、よろしく願いいたします。今般のウクライナ人道危機は連日、ニュースでよくご存じと思います。私どもは3月中旬に、私がまず第1陣として、隣国のポーランドにまいりまして、支援活動を開始いたしました。現在、ポーランドと、それから南側のモルドバにチームを送りまして、支援活動を行っております。

ウクライナ人道危機、難民・国内避難民支援の現場についてご報告をいたします。まず最初に、難民を助ける会について少々ご説明を申し上げます。1979年に創立いたしました、40年余りの歴史を持つ日本生まれの国際NGOでございます。もともとはインドシナ難民、ボートピープルの人たちを助けるために設立された団体でございますが、その後、世界中に活動範囲を広げまして、現在は日本国内を含めまして世界16カ国で難民支援、あるいは障がい者の自立支援、災害の被災地支援等を行っております。

本題のウクライナ人道危機に関してですが、地図をご覧ください。(スライド①)古いデータですので、あくまで地図としてご覧ください。ウクライナがございまして、そこから隣のポーランドは濃い緑色の所、ここに難民の6割が流入しております。南側に小さいモルドバという内陸国がございまして、周辺国への難民、既に500万人を超えております。それから、国内にも700万人を超える国内避難民がいて、全体では1200万以上。これは、総人口の3割近くに匹敵する数の人たちが家を失って、今、避難してるということでございます。このうち60パーセントほどがポーランドに流入しております。ポーランドが一番大きく、難民を受け入れてる国でございます。

私が現場に行きまして、すぐに気付いたウクライナ難民の特徴というのは三つございます。ポーランドのことですが、まず一つは、難民キャンプというのは存在いたしません。



スライド①

難民問題といいますが皆さん、よく白いテントが立ち並ぶ難民キャンプを無意識に想像されると思いますが、そういうものはございません。国境地帯から非常にシステムチックに整備された形で、移送されていきます。ポーランドはEUの加盟国でございますので、ウクライナからポーランドに入国するということは、すなわちEUに入域するという意味でございます。

それから、大変顕著な特徴でございますが、難民の9割が女性と子ども、特に若いお母さんと幼い子どもの組み合わせというのが圧倒的に多数を占めております。これにおじいちゃん、おばあちゃんが同行してると。これはウクライナ当局が祖国防衛への動員ということで、成人男性の出国を原則として禁じていることの影響でございますけれども。これは私が今まで見てきた難民の姿としては、非常に異質といいますか、不自然といいますか、ユニークといいますか、そういう形でございます。

もう一つの大きな特徴は、ポーランドの場合、市民社会が難民を主体的に受け入れているということでございます。やはり難民といいますが、その国の政府やUNHCRに代表される国連機関が主導して受け入れるというのが通例でございますが、ポーランドにおきましては、一般市民の方、あるいは地元企業がボランティアベースでさまざまな活動をしているという大きな特徴がございます。

私がかつと、バングラデシュのロヒンギャ難民問題というのが専門でございまして、アジア・アフリカの旧来型の難民の姿を見てるということで、今回、目新しかったという面もございしますが、21世紀、第1四半期に起きておりますアジア最大の人道危機、ロヒンギャ難民と、欧州のウクライナ難民を分かりやすい形で比較してみたいと思います。

分かりやすくご説明しますと、難民キャンプは、まず存在しないということですが、これはバングラデシュのロヒンギャ難民キャンプです。今、世界最大級の難民キャンプといわれてまして、このキャンプだけでも60数万人が既に5年近く、いわゆる塩漬け状態になって、こういった過酷な環境で暮らしております。対しまして、ウクライナ難民は、ポーラ

ンドに入国いたしますと、これは一つの収容センターというか、一時滞在センター、レセプションセンターと呼ばれている施設ですけれども、こういう大きな避難所のような所に収容されてきて。ただし、ここは長期滞在する所ではございません。2、3泊いたしますと、次の目的地、これはポーランドの国内でもありますし、あるいはドイツやフランス、スウェーデンといった国々もございますけれども、そういった国に自由意志で移動していくことができます。移動のための電車やバスは原則無料でございます。

それから、顕著な特色として、女性と子どもが9割を占める。これは再びバングラデシュのロヒンギャ難民の家族ですけれども、通常の難民の人たちというのは、こういったお父さんとお母さん、それから子どもたちがいて、生まれたばかりの赤ちゃんも見えますけれども、これが通常の形でございます。確かに過酷な環境ではありますが、家族と一緒に逃げて、一緒に支え合うという形態がございます。対しまして、ウクライナ難民については、この写真は典型的なんですけれども、比較的若い30代ぐらいのお母さんと、まだ小学生ぐらいの子ども、それから、恐らくおばあちゃんが付き添っています。こういった組み合わせが実に9割を占めるということが極めて顕著な特色でございます。

それから、市民社会の受け入れということです。これは再びバングラデシュのロヒンギャ難民キャンプですが、バナーに UNHCR、それからバングラデシュのロゴが貼ってあります。それから、いわゆるドナーといいますが、この人道支援に拠出している国々が、日本の日丸も見えますけれども、ございます。こういう形で国連と政府、それから先進国を中心としたドナー各国が大きなスクラムを組みまして、そこに私どものような NGO も参画して、非常に制度化された大きな枠組みの中で人道支援を実施しております。これに対しまして、今般のウクライナ難民の受け入れ、ポーランドにおきましては、一般市民が主体となっております。左側で黄色いゼッケンを着ているのは、全て一般のワルシャワ市民の方たちです。こういった食材ですとか、それから携帯電話の SIM カードですとか、衣料品ですとか、そういったものを地元の企業が無償で提供しているという状況がございます。

もちろん政府は、EU 全体としての取り組みというのはまた別にございまして、何もしてないってことはございませんけれども。例えばこの難民の人たちは、難民キャンプの代わりにどこにいるのかといいますが、ポーランドでは実に8割が一般の家庭に迎え入れられて、ホームステイといいますが、民泊といいますが、そういう形でこの間をしのいでいます。一部は地元行政が借り上げたホテルに入ってる人もいますが、非常にキャパ的に限られております。見ず知らずの難民を一般家庭に受け入れるというのは、非常にホスピタリティーと申しますか、私も大変、感銘を受けました。

今回の EU 圏への難民受け入れ、これは 2001 年に EU で決めました一時的保護指令というシステムがございます。緊急措置でございますけれども、大量に難民が発生した場合、一人一人を吟味して難民認定をすることはできないということで、通常の難民申請手続きなしに取りあえず入れてしまう。それから、居住権ですとか、就労権、こういったものも一定期間、認めていく。さらに医療や教育などの公共サービスにもアクセスできるようにするというので、ポーランドの場合は一般国民と同等の ID、日本でいうとナンバーカードみたいなものだと思いますけれども、それを発給いたしまして、難民の人たちが取りあえず最低限の生活ができるように保障してございます。既に 80 万人ほどが、この ID を受

け取っていると聞いております。

ただし、この一時的保護指令は、いささか問題といたしますか、いろんな問題をはらんでおりまして。2015年の欧州難民危機、非常に大きな話題になりましたけれども、このときはなぜか発動されておりません。今回は手のひらを返すように発動されているという事実があるということを指摘しておきます。

きょうは政治の話をする場ではございませんけれども、ポーランド国境ってというのは非常に重要な意味を持っております。私も実はヨーロッパというのは、ほとんど経験がございませんが、ウクライナ、ポーランド国境というのは単なる国境ではなく、EU、それから NATO（北大西洋条約機構）の外郭線であるという、非常に戦略的にも重要な意味を持ちます。先月の下旬に、バイデン大統領がわざわざ、この国境地帯まで行って、駐留米軍を激励するというのをやりましたけれども、これは今般の戦争において、NATO 側が民主国家・自由陣営の戦いとして、このポーランド国境を位置付けてるということなんだろうと思います。実際、この地域にまいりますと、もともと米軍が開発いたしました地对空ミサイル、パトリオットが普通に目に見える形で展開をしているのが分かります。つまり、これは、NATO 軍とロシア軍が対峙する戦争状態だということを、あらためて感じた次第です。

## AARの人道支援活動（2022年4月現在）

### 1) ウクライナ国内避難民支援

ポーランドのカトリック修道会と連携  
 日本のご寄付を送金→食料・医薬品・  
 衣料品などを調達→陸路越境して輸送

西部テルノピリ州の修道院（支部）へ  
 = 東部から逃れた母子など数十人が滞在。  
 ポーランドを目指す避難者の拠点でもある

### 2) モルドバでの難民支援

スライド②

さて、私ども AAR の人道支援活動について、具体的な取り組みをご紹介します。（スライド②）2 本立てで今、動いております。一つは、私がポーランドに行って立ち上げた事業ですけれども、ウクライナ国内避難民支援を一つやっております。これはポーランドのカトリック教会、カトリックの修道会といろんなつながりでご縁ができて、このカトリック修道会と連携して、日本で皆さまから頂きましたご寄付を送金し、ポーランド側で食料や医薬品、あるいは子どもの服や靴、赤ちゃん用のおむつとか、女性の生理用品とかを調達いたしまして、これを陸路、越境してウクライナ側に運んでおります。



この修道会というのはもともと、ポーランドとウクライナ両国にまたがってネットワークがある団体でございまして、ウクライナ東部のテルノピリ州という所に、修道院、支部のような修道院を持っております。ここには、ロシア軍の攻撃にさらされまして東部地域から逃げてきた母子、お母さんと子どもなどが 80 人ほど滞在しております。また、ポーランドを目指して避難する方の臨泊施設といいますか、拠点にもなっている。歴史のある美しい修道院でございしますが、現在はそういうふうな機能をしております。

もう一つはモルドバでの難民支援。先ほど動画でご覧いただきましたけれども、モルドバにも 40 万人ほどの難民が流入いたしました。そのうち 30 万人ほどは、既にヨーロッパの他の地域に抜けていっているということで、モルドバに残っているのは大体 10 万人ぐらいでございます。この方々に食事を提供する等の活動を立ち上げたところでございます。

ウクライナ、それから西部のほうにテルノピリというのがございます。地図で見ますと、ワルシャワからすぐかなって感じですけども、車を走らせますと相当、距離がございまして、通関の時間などを考えますと、丸々 2 日かかりで到着するような地域でございます。南側に非常に小さな国ですが、モルドバがでございます。

お話し申し上げましたとおり、このテルノピリの修道院には、東部地域の母子施設から逃れてきた人たち、これは何らかの事情でシングルマザーとして子育てをしていたお母さんたち、子どもたちが集まっている母子寮みたいなものが、そういった施設があったと聞いております。そこがロシア軍の攻撃で破壊をされまして、それぞれが身一つで逃げてきて、今、ここに身を寄せているということでございます。やはり子どもたちが多くて、収容されている 80 人のうち 50 人ほどが子どもでございます。赤ん坊もいます。乳幼児から大体 10 歳ぐらい、小学生ぐらいまでの子どもたちがここに集まっております。今、ウクライナでは学校の授業ができておりませんので、修道院の中で、シスターたち、それからお母さんたち、あるいは地元の学校の先生たちがボランティアとして教室を開いて、子どもたちを教えたり、幼い子どもたちを集めて幼稚園のようなものを、この修道院の一室を使って運営しているということでございます。

ワルシャワの修道院を拠点にいたしまして、いろんな支援物資を調達したり、それから、この修道会の信者さんといいますか、関係してる方々が、ドネーションという形で寄贈したりしたものを取り集めまして、現地に送るといって活動をしているわけです。ここは、場所はワルシャワですけども、真ん中の白い服を着てる若いシスター、この方はウクライナ人です。

これは修道会にある学校で、学校の子どもたちが箱詰めをしたりしてるところでございます。ここの学校の父兄、PTA といいますか、父母たちも大変大きな働きをしております。私たちのドネーションだけで全てのを調達しているわけではありませんが、もともと、このワルシャワの人たちとか、修道院の人たちが送っている支援物資に、いってみれば私たちも相乗りさせてもらう形でお送りをしております。私たちは子どもの食料品ですとか靴とかおむつとか、そういったものを送っておりますが、この修道会から別ルートで送られているものの中には、防弾チョッキですとかヘルメットですとか、そういった武器ではないけれども軍用品、ウクライナの志願兵が使うような、一般市民が使うような、民生品と軍用品のボーダーなところのものを送られております。一般市民のかたがたはこれらを普通に送ってございまして。これはまさに、ポーランドの人たちも、これを一つの戦争とし

て非常に深刻に受け止めてるっていうことの表れかと思います。

こうしてお送りした物資が順次、届いております。週にせいぜい1回ぐらい、数日に1回ぐらいのペースでしかお送りできておりませんが、それは無事に到着したよということで、子どもたちが、われわれのロゴを掲げて写真を送ってくれました。これは、おむつが大量に入っております。これは紛争地でもそうですし、日本国内の災害の被災地でもそうなのですが、最初はみんな、食料、それから着る服、衣服はあるのかとか、取りあえず雨露がしのげる所はあるのかっていうことをまず心配するんですけども、次の段階でふっと気が付くのは、赤ちゃんのおむつがない。それから、女性の生理用品がないということが、次の段階で皆さん気付くというのが大体、通例でございまして。今回も、特に子どもたちが多いということで、このニーズがありまして、おむつを大量に送ったり、子どもたちの靴とかサンダルが欲しいということで、そういったものも送ったりしております。これは届いた物資、寝袋とマットですかね。子どもたちが手分けして運んでいる風景でございます。

ここに収容されてるのは、若いお母さんと、それから赤ちゃんや小さな子どもたちでございます。それぞれどういう事情が分かりませんが、ウクライナでシングルマザーとして子育てをしていたということは、経済的にも社会的にも決して恵まれた方々ではないと思われまいます。こういった人たちが寄り添っていた母子寮、そういった施設も攻撃で壊され、あるいは住めなくなって、命からがら逃げているという現状がございます。

それから、まだこれは詳しい調査をしておりますけれども、写真を見て一目でお分かりになるように、この右側の子は何らかの障害を持ったお子さんと思われまいます。当然ながら、難民、避難民の方々の中には一定の割合で、障害を持っている方、あるいは今般の攻撃でけがをされた方も当然おられるわけでありまして、そういった人たちへの手当といえますか、支援というのも今後、情報収集しながら進めていく必要があるだろうと思っております。

残念ながら私はまだこのテルノポリに行っておりません。なるべく早く行きたいと、今スタンバイしているようなところでございますけれども、現地のシスターたちと、ワルシャワからオンラインでお話をいたしました。右の方が修道院長、ポーランド人の方です。左奥におられるのがウクライナ人のシスターの方です。この方たちに、日本でも連日、このウクライナの戦争というのがトップニュースで報道されていて、多くの日本人が関心を持ち、心を痛めている。私たちAARにも、連日のようにご寄付が寄せられている。それを使って皆さんに支援物資をお送りしてということをお伝えしましたところ、このシスターたちは本当に大粒の涙を流して、遠い日本からこのような支援をいただけるとは思ってもいなかったと。大変、心強く思ってる。ぜひあなたを通じて日本の人たちにお礼を言ってほしいということで、ずっと涙を流しながら話をされていたのが、大変、印象に残っております。私はタイミングを見て、一日も早くこのテルノポリに行って、皆さんに直接お会いしたい、それから物資をお届けしたいと思っております。

モルドバでございます。難民の方たちが滞在している大学の学生寮、それから保養所と呼んでましたけど、公共施設でございます。そういった所に食材を届けております。それからこれは、先ほどの修道院でも実は提供していますが、洗濯機をお送りいたしました。避難が長期化に伴いまして、特にお子さんたちがいっぱいいると、洗濯物がどうしても多

くなります。これを手洗いすると、なかなかお母さんたちにとっては大変なことございまして、こうやって洗濯機が1台、2台あるだけで、大変、体力的にも精神的にも助けになるということで、洗濯機を提供しております。

それから、食事は食材だけではなく、レストランに注文いたしまして、毎日1食、お昼ですけれども、温かい食事を作ってお届けする、デリバリーサービスもやっております。メニューはなかなかいい感じのメニューで、フルコースとは申しませんが、温かいスープや肉料理等々、バランスのいい食事をご提供できております。

少し話が変わりまして、今はこのような形で食料ですとか、それから衣服ですとか、そういったものを緊急フェーズの支援として行っているところをございまして、既に2カ月近く時間が経過してございます。まだまだプーチンが強気で、停戦合意は兆しが見えておりません。また、仮に停戦ということになりましたら、これでおしまい、片付いたということでは全くなくて、むしろこれからございます。あれだけのテレビのニュースで連日、報道されてるような、徹底的な破壊を受けた東部地域の復興には、数年なり10年なり、それ以上なりの時間が当然かかります。難民や避難民の人たちが、元いた所に戻って生活を再建するには相当な時間がかかります。

とりわけ、難民、避難民、子どもたちが大変多いということで、学校に行けない状況が続いております。これは先ほどのテルノピリの修道院でございます。つい先日ございますが、子どもたちのオンライン学習用のパソコンが欲しいということで、私たちの資金でご提供いたしました。ウクライナ国内では学校が閉鎖されている代替措置ということで、オンライン授業が行われているようでございます。そこにアクセスするためにパソコンをご提供いたしまして、今月に入って子どもたちが、小学校相当の子どもたちだと思いますけれども、勉強を始めたというレポートが届きました。また、この小学校のお兄ちゃんたちは、勉強の時間の他にはインターネットで子ども用の番組ですとか、アニメーションですとか、そんなものを探して、弟、妹たち、幼い子どもたちに見せて、皆で助け合いながら生活していると聞いております。

さて、今後、難民がどうなっていくかという問題でございますけれども、これはポーランドに限ったことですが、260万人ほどが流入して、ほとんどがポーランド国内に残留してるようです。一部は、入ってきた当初から、ドイツ、それからフランスとイギリス、それからアメリカにも移動しているということでございます。ワルシャワ大学などがちょうど先週、発表したばかりの最新調査がございます。興味深い内容なんですが、戦争が終わったらすぐに帰国したいという人が56パーセント。ポーランドに一定期間滞在するという人、これは少なくとも1年ないし数年、あるいは永住したいという人も含めてですが、少なくともしばらくはポーランドにいるという人が30パーセント。それから、他の国に移動したいと言ってる人たちが12パーセントぐらいおります。いずれにしても、かなりの人たちがポーランドに、少なくとも当面、残留することになります。

これは、一つは家族をウクライナに残しているということで、タイミングを見てすぐにも帰りたいという、当然のことでもあります。それから、ポーランドが比較的、手厚く彼らを迎えている。それから、言語的にウクライナ語とポーランド語というのは、お互いしゃべったら40パーセントぐらい分かるんだそうございます。私はその辺の感覚がよく分かりませんが、全く無縁の地ではないらしくて、もともとポーランドには100万人

以上のウクライナ人コミュニティーもあったということで、若干の親和性がある。ということで、ポーランドに残りたい人が圧倒的に多い。

ただ、それによっていろいろな問題が生じます。就労とか、それから公共サービスへのアクセスというのが保障されると申し上げましたけれども、では彼らはどこに住むんだということで。民間家庭の、一般家庭のホームステイというのは限界がございまして、大体1カ月ぐらい経たところで難民の人たちも、それからホストのほうも音を上げ始めた。これは当然のことです。他人が家の中で住んでるわけですから、だいぶ気疲れしてきたということで、住居を提供しなきゃいけない。人口200万人ほどの小さな首都でありますワルシャワだけで、30万人ぐらいの住居が不足しているという話も聞いております。ポーランドの負担というのは決して小さいものではないということがお分かりいただけるかと思います。

これは、また再びテルノピリの修道院の親子でありますけれども、こういう方たちがかなり長期間、故郷の町に、元の町に戻れない状況で、復興支援あるいは人道支援といったものが今後ますます重要になってくる。仮に停戦が成立してもそれで終わりではなくて、むしろそこから始まるというふうに私どもは認識しております。以上、簡単ではございますが、私からのご報告は以上とさせていただきます。ありがとうございます。

※基調報告の内容につきましては、2022年4月21日の講演日時点での情報をもとにお話いただいております。

※公開講座「ウクライナ人道危機 難民・国内避難民支援の現場」は、  
敬愛大学公式 You Tube チャンネルよりご視聴いただけます。  
視聴 URL : <https://www.youtube.com/watch?v=rSYUAoxfHZs&t=2413s>